

# 問3:エジプトのキリスト教の歴史と特徴

松山 和弘

2014 年 11 月 16 日

カルケドン公会議までのエジプト教会の歴史と特徴を説明する。

## 1 キリスト教徒への弾圧

キリスト教徒への弾圧として、セプティミウス帝 (在位 193-211)、ディオクレティアス帝 (在位 298-305) によるものがある。

エジプトのキリスト教徒は、ローマの帝制に否定的であり、強く抵抗したため、殉教者が多かったとされている (弾圧の規模がどうだったかは検証を要す)。

修道士アントニウスが生きた時期は、ディオクレティアス帝による迫害の時期とその後のミラノ勅令後と重なる (これらが、アントニウスや他の多くの修道者へ与えた影響は興味深い)。

## 2 ニカイア公会議

ミラノ勅令 (313 年) 後のニカイア公会議 (325 年) では、ニカイア・コンスタンティノポリス信条の元となったニカイア信条が採択された。ニカイア信条には、イエスが神の子であり、神であることが明記されている。ニカイア信条策定には、アレクサンドリア司教アレクサンドロスと後に司教となるアタナシウスが主導している。

アレクサンドリア教会が、キリスト教の教義成立に及ぼした影響は大きいと言える。

## 3 エフェソス公会議

コンスタンティノポリス司教ネストリウスは、マリアを「神の母」と呼ばず、「キリストの母」と呼ぶと主張した。

エフェソス公会議 (431 年) にて、アレクサンドリア司教キュロスは、これを批難し、ネストリウスを異端として追放した。

両性説 (イエスは神性ともに人性をもつ) の立場の場合、「神の母」、「キリストの母」のどちらでもかまわないとすることができる。ネストリウス追放の正当性には疑問がある。

## 4 カルケドン公会議

カルケドン公会議 (451 年) では、両性説に対する、単性説 (イエスは神性のみもつ) の排斥が行われた。

単性説側のアレクサンドリア司教ディオスコロスが異端とされ、追放となった。これが、非カルケドン派教会の始まりとなる。

## 5 非カルケドン教会の単性説

非カルケドン教会は、単性説というところになっているが、現代のコプト教会では、必ずしも単性説を前面に出して主張しているわけではないようである。とすると、教義面でのコプト教会とカトリック教会、正教会との差は大きくないと考えられる。組織面ではカトリック教会、正教会と同様に司教制をとっている。よって、司教制をとらないプロテスタント諸教会とカトリック教会との差よりも、コプト教会とカトリック教会、正教会との差は小さいのかもしれない。